

11 ガレノスとヴェサリウスの解剖学の

比較研究 (二)——門脈を例にとつて

坂井 建雄

ヴェサリウスの『ファブリカ』(二五四三)の第三巻は、静脈と動脈を扱う。その中で真っ先に扱われるのは門脈、それに続いて全身の静脈、そして全身の動脈である。これはガレノス説を意識した取り扱いである。ガレ

ノスによる門脈の記述は『身体諸部分の有用性』(第四・第五巻)、『解剖手技』(第六巻、アラビア語訳で伝存する第一三巻)、『静脈と動脈の解剖について』に含まれる。ヴェサリウスは『解剖手技』の第一三巻は見えていないが、残りの著作についてはラテン語訳の改訂を担当するなどして熟知していた。ヴェサリウスの『ファブリカ』の第三巻についてはRichardsonによる英語訳(二〇〇二)がある。ガレノスの『身体諸部分の有用性』にはMayによる英語訳(一九六八)、『解剖手技』の前半

部分にはSingerによる英語訳(一九五九)、後半部分にはDuckworthによる英語訳(一九六二)がある。『静脈と動脈の解剖』にはGossによる英語訳(一九六一)があり、坂井・池田・月澤・澤井が日本語訳を行っている。

門脈の形成パターンは変異に富んでいる。現在の解剖学では上腸間膜静脈(空腸、回腸、結腸右半から)と脾静脈(脾臓、胃、脾臓から)の二主枝が合流して形成されるが、下腸間膜静脈(結腸左半、直腸上部から)は二主枝のどちらかに注ぐ、と記述される。

ガレノスによる初期の『身体諸部分の有用性』では、第四巻と第五巻で栄養の器官を扱い、第四巻の末尾と第五巻の冒頭に、門脈の記述がある。門脈の枝が腸(栄養を受け取るために)だけでなく胃と脾臓にも分布すること、肝門からやや下がって、胃と腸の間あたりで多数の枝に分かれていること、門脈の分岐部には脾臓があって保護していること、を述べている。門脈の分岐や枝の走行について、具体的な記述はない。

ガレノスによる門脈枝の分岐と枝の走行についての具体的な記述は、『解剖手技』の第一三巻と、『静脈と動脈

の解剖』に含まれている。両者の記述はほぼ一致しているが、『解剖手技』の記述がより詳しいこと、『静脈と動脈の解剖』の中で繰り返し『解剖手技』の書名を挙げていることから、『静脈と動脈の解剖』は、『解剖手技』の後で書かれ、その内容を要約したものと考えられる。

ガレノスは、門脈が七本の枝に分かれると述べており、①右胃静脈、②脾静脈、③下腸間膜静脈、④右胃大網静脈、⑤右結腸静脈、⑥空腸静脈、⑦回結腸静脈、に相当する。『解剖手技』の第一三巻では、②と③が共通幹を作ることがあり、その場合には④以下の番号が繰り上がると述べている。この記述は、『静脈と動脈の解剖』にはなく、ヴェサリウスは読んでいない。

ヴェサリウスの『ファブリカ』第三巻では、第五章が門脈を扱い、その冒頭に門脈の全体図が掲げられている。この図でもまた本文でも、門脈は、二本の主枝に分かれるとして扱われる。左の主枝は脾静脈にあたり、左胃静脈、左胃大網静脈、脾臓枝の他にも、結腸域からと思われる静脈が記されている。右の主枝は大きく三枝に分かれ、腸に分布する。そのうち二本は、上腸間膜静脈

に相当するもので、小腸から結腸右半にかけて分布し、第三の枝は下腸間膜静脈にあたり、結腸右半から直腸にかけて分布する。二本の主枝以外の枝（胆嚢静脈、右胃静脈）も記されている。ヴェサリウスによる門脈枝は、ガレノスによる七本の枝をほぼ含んでいるが、七本を並列するという扱いから、大きな二本の主枝に重点を置くという扱いに変更されている。またガレノスの門脈枝の最後の三本は、二本にまとめられている。

門脈枝について、ヴェサリウスはガレノスの記述を十分に踏まえた上で、自家所見に基づいて、かなり大幅な変更を行っている。しかしこの門脈枝についての変更を理由として、ガレノスを批判したという非難を、とくに受けている訳ではない。門脈枝についての章で、ヴェサリウスはガレノスの記述との食い違いに、とくに言及していない。第六章と第七章では、ガレノスの記述との食い違いを強調したり、ガレノスとアリステレスの教説の違いに触れたりしている。門脈についてのみ、ガレノスとの差異を無視したのは、なぜだろうか。